

# 日露戦争の傷病兵と地域社会

——「名誉の負傷」をめぐる——

今 西 聡 子

はじめに

近年、日常社会における軍隊の存在を歴史的に位置づけようとする研究が、活発に行われるようになった。軍都の形成と都市問題、軍事演習や在郷軍人会と地域の関係、戦死者の慰霊や顕彰のあり方、軍隊と地域振興の関係など、軍隊の存在が地域社会にとってどのような意味を持つのか様々な切り口から論じられている。こうした「軍隊の社会史」とも言うべき研究動向を踏まえつつ、本稿では戦争や軍隊と地域社会との関係や相互作用について、傷病兵をめぐる問題を通して考察したい。

傷病兵の中でも戦闘によって四肢や両眼を失うなどの重傷を負った者が、「不具」の身となつて戦後の社会を生きていくのは、肉体的にも精神的にも経済的にも容易なことではなかったに違いない。戦争や軍隊と地域社会をめぐる問題を考える時、このような障害を負った兵士、いわゆる「癱兵」にも目を向ける必要がある。戦争が終わり人々に平穏な日常が戻っても、癱兵の身体は元に戻らない。除隊して故郷に帰った彼らの日常に、地域社会はどう向き合つたのだろうか。

そこで、本稿では癱兵が日本で初めて大きな社会問題となつた日露戦争に焦点を当てることにする。ただし、癱

兵問題は日露戦時にはほとんど顕在化していない。市井の人々は、まるで癡兵など存在しないかのように「名誉の負傷」に歓声を上げていたのである。こうして戦時中に喝采を送っていた地域の人々や喝采を浴びて歓迎された兵士たちは、戦後どうなったのだろう。本稿では傷病兵（とりわけ負傷兵）と地域社会の関係について、「名誉」に注目しつつ戦時と戦後の両面から検討する。

本論に入る前に、「癡兵」という用語について触れておこう。軍隊内部では軍隊草創期からこの用語が使われていたが、一般に広く普及するのは日露戦争以後のことである。戦闘・公務・疾病により生活能力を失い、軍人恩給法で増加恩給、傷病賜金を受けた傷病兵のことを「癡兵」と言った。「癡」とは病氣や怪我により体の一部を損ない、それが一生障害として残ることを意味する語である。今では「廃兵」と書くこともあるが、厳密に言えば「癡」の旧字は「廢」であって「癡」とは別字である。とは言え、当初から「癡」と「廢」の混用はあったようで、「廢兵」と記載された事例も散見される。本稿では厳密に「癡兵」の表記を用いることにする。ちなみに、癡兵は一九三一（昭和六）年に傷痍軍人と改称された。

## I、戦時の傷病将兵と地域社会

### （1）傷病将兵の転地療養

日露戦争では35万人を越える将兵が戦場で負傷したり重い病気に罹って入院している。彼らは戦地の野戦病院や兵站病院などで応急的な治療を受け、さらに治療を要する場合は内地に後送されて、多くは一旦広島予備病院に収容された。予備病院とは各師団の陸軍病院（衛戍病院）を基幹にして戦時編成された病院で、全国12カ所の師団司令部所在地にあった。広島予備病院で治療を受け、列車輸送に耐え得るまでに回復すると、今度は各師団司令部所在地の予備病院に転院して治療を続ける。広島予備病院や大阪予備病院など一部の病院を除き、各予備病院は基本

的にはそれぞれ所管師団の傷病將兵を收容することになっており、必要に応じて転地療養所を開設して長期療養が必要な傷病將兵を転送した。

転地療養所は各予備病院がそれぞれ地方の温泉地や海浜など適地を選んで開設し、陸軍が地元の旅館や寺院などを借り受けて、各予備病院から数百名規模の傷病將兵を転送した。療養期間は区々だが数か月から半年前後のケースが多く、入れ替わり次々に療養患者が転送された。兵卒は治癒すれば原隊に復帰し、治癒しなければ除隊となつて帰郷する。したがって、戦時中に傷病將兵が地域社会と直接的に関わるのは、除隊した場合を除けば、転地療養所が開設された地域がほとんどである。

では、転地療養する傷病將兵を各地の住民はどのように迎えたのか、まずは当時の新聞報道や兵士の従軍日記からその様子を見てみよう。予備病院から各転地療養所までの移動には、主に鉄道、人力車、川船などの輸送機関が使われた。そのため、転地療養所に到着するまでの移動の途上、彼らは要所ごとに地元住民の出迎えや見送りを受けることになる。その様子から見ていくことにする。

たとえば、第十師団の姫路予備病院から城崎の転地療養所に向かう途上では、傷病兵一行が生野駅に到着すると、「愛国婦人会、学校教員生徒、及び同町村民」が「ブラットホームニ整列」して「軍楽ヲ奏シ盛大ニ歓迎」し、さらに豊岡町では「各戸に国旗を掲げ」て「此の勇士を盛に歓迎」した。<sup>②</sup>昼食時には養源寺で「町民一同」が「満腔の赤心を以て優待」し、「旧檢芸妓のお給仕」まで提供している。いよいよ城崎に到着すると、今度は「地方名譽職学校職員生徒及び旅舎」が一行を出迎え歓迎した。<sup>③</sup>城崎小学校に残されている『学校日誌』には、傷病兵を歓迎するため連日のように児童を引率して行ったことが記されている。城崎に生まれた実業家太田垣士郎（一八九四年（一九六四年）の伝記によれば、当時小学生だった士郎は傷病兵が城崎に送り込まれるたびに、同級生たちと日の丸の小旗を持って円山川の船着場まで出迎えに駆け出されたという。<sup>④</sup>

城崎の場合と同様に、姫路予備病院から兵庫県加古郡の高砂転地療養所に向かった傷病兵一行も、途中の加古川駅で「三輪郡長及夫人を初め、同町有志並に婦人会員、各町村長、赤十字社員數百名」の出迎えを受け、人力車を連ねて高砂町に向かつてゐる。<sup>⑤</sup>そして、町の入り口に到着すると、「八百余名の小学校児童」と「村民數百名」が一行を歓迎した。こうした歓迎ぶりは姫路予備病院に限ったことではない。例えば、第四師団の大阪予備病院から有馬の転地療養所に向かったケースでも、傷病兵を乗せた列車が三田駅に到着すると「有馬町から楽隊も三田に出迎え」、「沿道の町村は皆国旗を掲げて之を歓迎」している。<sup>⑥</sup>このような、地域を総動員した組織的で大規模な歓迎はおそらく全国各地で行われていたものと思われる。

静養する必要があるからこそ転地療養に赴くはずの傷病兵たちは、まるで凱旋を果たした英雄のように各地で熱烈な歓迎を受けながら転地療養所へと向かったのである。陸軍当局はこれが軍紀の弛緩に繋がることを懸念したらしく、明治三十七年九月二十四日付で各留守師団長に宛てて次のように訓示している。<sup>⑦</sup>

地方人民ノ患者ニ対スル歓待其度ヲ過キ、慰安ノ目的ヲ脱シテ静養ノ主旨ヲ害スルニ至ルノ傾向アリ。此等ノ点ニ就テハ内務大臣ヨリ地方官ニ訓示スル所アルヘシト雖モ、陸軍ニ於テモ適當ノ注意ヲ以テ弊害ヲ惹起セシムルコトナキヲ努メサルヘカラス。

陸軍は、人々の過度な歓待による弊害を危惧していたのである。果たしてそれがどのような弊害を意図していたのか定かではないが、確かに地域を挙げた熱狂的な歓迎によって將兵たちの自尊心が煽られ慢心を生んだ面はあるだろう。少なくとも、軍規を無視して放縦に流れた傷病將兵が各地で問題を起こしたことは、事実である。<sup>⑧</sup>

ただし、「秩序頗ル紊乱セルモノ」は転地療養所の傷病將兵に限ったことではない。例えば、大阪予備病院では「我ハ名譽ノ負傷者ナリ、多少ノ自由ハ默許ノ間ニ之ヲ行フモ妨ケ勿カラン」との考えを抱く者が少なくなかった。中には「病衣ノ上ニ墨染ノ法衣ヲ纏ヒ僧侶ニ仮装」して病院を抜け出し市中の「鮮屋ニ立入り飲食」する者や「数

珠ヲ手ニシ遊郭ヲ徘徊」する者もいたし、取締の憲兵に向かって「構内ヨリ礫ヲ投」じる者もいれば、見習医官を「毛布ニ包」んで「殴打」する者もいた。<sup>(9)</sup>「名譽ノ負傷者」を自認しての驕恣である。

## (2) 陸軍転地療養所と地域社会

陸軍が開設した転地療養所は、地方行政がその運営をサポートした。たとえば、城崎では「町会議員区会議員の全部（十六名）を三組に分け、十日間交代で送迎其他百般の事務を処理」することとし、鈴木助役が委員長となつて金銭の出納などを監督している。<sup>(10)</sup>鈴木助役は「老体を厭はず去月上旬から昼夜詰切」の状態だったようである。また、大阪予備病院が兵庫県川辺郡の中山寺に開設した転地療養所では、中山寺の事務所内に長尾村役場の出張所を設け、村長と助役と各区長二名ずつが出張して業務に当たっている。<sup>(11)</sup>各地から慰問者が続々と中山寺を訪れて雑踏したため、伊丹署の出張所も設置された。有馬では町役場と警察分署が、実にこまごまとサポートしている。例えば、転院患者用の人力車を揃えるために徹夜で奔走したり、商売を始める醜業婦人を説諭したり、軍人相手の商売を当て込んで有馬にやってきた行商を排除したり、さらには「弁当方に不行届はないか、掃除方に不足はないか」といった細事に至るまで、全て町役場と警察分署が対応した。<sup>(12)</sup>

このように、地方行政が陸軍の転地療養所を強力にバックアップしていた。先述したような地域を挙げた組織的で大規模な歓迎も、地方行政が主導して地元住民や学校職員や生徒、婦人会などを総動員していたものと思われる。城崎小学校の『学校日誌』にも「傷病兵士53名来湯の通知を受く。ために午後6時頃生徒を集めて歓迎をなさしむ」（明治三十七年九月二日）と、学校が当局からの動員要請を受けて生徒を引率していた様子が記載されている。傷病兵の転地療養を滞りなく実施するために、陸軍と地方行政が一体となって取り組んでいたことを、こうした多くの事例から窺い知ることができる。

一方、陸軍輜地療養所の開設は地元の社会に様々な影響を及ぼした。一つは景気がよくなったことである。言わば、「輜地療養所特需」である。療養中の将兵を慰問するため各地から大勢の人々が訪れるようになって、慰問者や傷病将兵を当て込んだ新規営業の飲食店なども日を追って増加した。その結果、当初は「軍人ノ傲慢粗暴ノ挙動」を警戒して受け入れを嫌がっていた旅館でも、「反テ希望スルノ有様」だった。<sup>(13)</sup>有馬では「一時軍用旅舎に充てらるゝ事を厭ひたる旅館も、先頃より進んで採用を希望し居るとは現金極まる」と、収益のためにあつさりと掌を返した旅館の姿勢が批判的に報じられている。<sup>(14)</sup>

その一方で、春画の密売者や醜業婦が現れるようになり警備が強化された所もある。地域の風紀は、景気の動向と共に療養所の軍記とも密接な関係がある。当然のことながら、療養将兵には軍規に従う義務があり勝手な行動は許されない。しかし、実際は大半の将兵が療養所内で閑を持て余し、軍規を無視して勝手に出歩いていた。有馬では「白衣の病傷兵」が「昼夜の別なく市中を散策」していたし、中には「三々五々組をなして市内を散歩し、彼方此方の家に立ち寄りては腰打掛けて」実戦談に興じる者や、就寝点呼後に変装して密かに療養所を抜け出し「一夜を外に明かす」者までいた。<sup>(15)</sup>如何に軍紀が弛緩していたかを物語ると同時に、それが町の風紀に悪影響を及ぼしていたことも、容易に想像できる。

これは有馬に限ったことではない。第九師団の金沢予備病院が山中温泉に開設した輜地療養所では「外出ニ就テハ何等制限ナキモノ」如く、昼夜ヲ問ハス三々五々村内ヲ散歩」するだけでなく、「夜間料理屋ニ登リ居ル者」もいたし、<sup>(16)</sup>城崎では「手拭ニテ頬冠リヲ為シ、或ハ鉢巻ヲ為シテ卑猥ノ俗歌ヲ高唱シ行クモノ」や「外出時限後、下士兵卒ノ潜出シテ酒食ヲ為シ、或ハ売淫婦ニ戯ルゝモノ」までいた。<sup>(17)</sup>

こうして見ると、特需によって景気が良くなることと、町の風紀が乱れることと、療養所の軍紀が弛緩することは、互いに相関し合う一連の現象として捉えることができる。陸軍の輜地療養所が置かれたことによって、一つの

巨大な波紋が広がったと言っても良い。

影響は地元住民の日常生活にも及んだ。城崎では療養中の将校が勝手に「個人又ハ村落ノ専有漁場ニ侵入」して「船ヲ艀シテ釣漁ヲ試ミ」ていたため、地元の漁民たちは「其職業ヲ妨害」されて被害を被っていたにもかかわらず、相手が「名誉将校ナルカ為メ遠慮シテ」文句も言わず我慢していた。<sup>(18)</sup>また、豊岡では城崎転地療養所を退所して姫路予備病院に戻る将兵一向のために前夜から「町内の俾は雇ひ切り」状態になっていた上に、彼ら以外の客を乗せた場合は当局から営業停止処分が申し渡されていた。そのため住民は人力車を利用することができず、中には用事を果たせなかった者もいて、当局の姿勢を「極端主義」と呼んで批判している。<sup>(19)</sup>

傷病将兵に対する当局の特別扱いは、城崎でも見られた。深夜に「五六人乱酔シテ二三ノ芸妓ヲ聘シ、前後構ハス如何ハシキ歌ヲ歌」って大騒ぎしている者がいたため、巡回中の警察官が注意しようとしたところ、芸妓を伴い泥酔して大声で下品な歌を歌っていたのは療養中の将校であった。この時、警察官は「将校ノ事ニモアリシ故、別ニ注意等ヲモ与ヘス、其儘ニナシ」ている。<sup>(20)</sup>

このように、地元住民の日常生活にまで支障を来すようになったのは、療養将兵の野放図な行為のためだけでなく、当局が彼らを極端なまでに優遇したためでもあった。陸軍としても「名誉ノ傷病ヲ受ケタルヲ以テ、彼等ヲ愛護慰撫スルノ念虜ニ驅ラレ、当局者ニ於テモ知ラス識ヲス監督ノ厳正ヲ欠キ、或ハ歓待其度ヲ過キ、自省ノ念慮ニ乏シキ彼等ヲシテ自然驕恣ノ風ヲ生セシムルニ至ルニアラサルナキヤ」と、当局の対応に問題があることを自認している。<sup>(21)</sup>

最後にもう一つ言及しておきたいのは、地元の小学校との関係である。生徒は傷病将兵の到着を出迎えただけでなく、学校が転地療養所の将兵を招待して学芸会や運動会を開いたり、中には遠足で転地療養所を慰問した学校などもあった。陸軍の転地療養所と地元の小学校がどのような関係にあったのか、ここでは城崎小学校の『学校日



誌』からその一端を見てみよう。

一つは、転地療養所に向かう将兵の休憩場所として小学校が利用されたことである。城崎転地療養所と言っても、実際は城崎温泉にある複数の旅館や寺院を宿舎に充てて開設しているため、数十名あるいは百名を超える将兵が到着した時は、一旦どこかの休憩場所に全員を集め宿舎の割り振りや注意事項の説明などを行う必要がある。その場所として小学校が利用されたのである。それ以外にも、各旅館などに分宿している療養将兵全員を集める必要があるれば、やはり小学校が使われた。例えば「療養軍人に対する両陛下からの御菓子料分配のため、軍人を集め訓達の式」(明治三十七年一月三日)を行ったケースなどが、これに当たる。

また、慰問袋を作るなど授業内容にも影響が及んだのだが、中でも「傷病兵士におくる帽子の裁縫方を受く」(明治三十七年一月一九日)という記録は興味深い。転地療養所では白い患者帽を着用することになっていたため、学校で帽子を作って贈ろうということになったのだろうが、おそらく帽子の裁縫は女子児童のみが行ったものと思われる。愛国婦人会が軍事援護活動として患者帽を縫って贈っていたことを考えると、これは「次代の銃後を担う女子教育」でもあった、と言えようか。

一方、とりわけ男子児童に影響を与えたのが推察されるのは、転地療養所の将兵を招いて児童に実戦談を聞かせたことである。実戦談の講演は何度も行われており、城崎小学校だけでなく周辺4校の生徒二〇八名を一堂に集めて開いたこともある。ほとんどの場合、来校して児童に実戦談を聞かせたのは、将校クラスの療養軍人だった。堂々としていて恰好良くて勇敢で、男子児童の目にはさぞかし眩しく映ったことだろう。「名誉の負傷」とはどういうものか、目の前で戦場の様子を語る軍人の姿を通して子どもたちは具体的に理解したのではないだろうか。

さらにまた、城崎転地療養所で療養していた将兵が死亡した際は、全校生徒に葬送の見送りをさせている。地元出身の兵士に対するような接し方である。のみならず、日本海海戦の祝勝会では「療養兵分宿所の二十二箇所の分



室の前に至る毎に万歳を三唱」(明治三八年六月四日)するなど、子どもたちが療養将兵に馴染んでいる一体感さえ感じられる。こうした数々の体験は、次代を担う子どもたちに大きな影響を及ぼすことになっただろう。

以上、戦時に陸軍の転地療養所が全国各地に開設されていたことに注目し、地域社会と傷病将兵との相互関係について具体的な事例を通して検討した。転地療養所が開設されて、地域住民も地方行政も学校も「名譽の負傷」に沸いたことは確かである。そうした昂揚が様々な形となって地域社会の随所に現れた、と言っても良いだろう。では、戦争が終わって平穩な日常が戻った時、両者の関係はどうなったのか。次に、視点を戦後に転じよう。

## II、戦後の癡兵問題

### (1) 地域社会と貧窮する癡兵

日露戦争の癡兵が社会問題として報じられるようになるのは、明治三八(一九〇五)年六月以降、すなわち日本海海戦に勝利して戦争の終結が見えてきた頃からである。それまでは除隊となった癡兵について名前や帰郷の日程などを地元紙が簡単に報じることはあっても、帰郷後の癡兵に関する報道は皆無と言ってよい。もちろん、それでは「癡兵」という用語があまり普及していなかったことに留意する必要がある。しかし、帰郷した負傷兵の現状がほとんど報道されていないことに、変わりはない。帰郷後の癡兵には取り立てて報じるような問題がなかったからなのか、あるいは単に癡兵に対する社会的関心がなかっただけなのか。報道されなかった事情については、改めて考えてみる必要がある。ともあれ、この頃から癡兵に関する報道が散見されるようになった。その遠因としては、愛国婦人会が癡病院設置に向けて動き始めたことや、参謀総長の山縣有朋が「癡病院設立二閱スル意見」を陸軍大臣に進達したこと、それを受けて政府としても癡病院の開設を検討するようになったことなど、全国レベルの永続的な癡兵対策が俎上に上り始めたことがあるだろう。

では、どのようなことが報じられるようになったのか具体的に聞いていこう。何を問題として取り上げ、それがどのように報じられているかを検討することによって、癪兵に対する社会的関心のありようを多少なりとも明らかにできるだろう。一つは貧窮する癪兵を取り上げたものである。<sup>(22)</sup>それは「名譽の勇士自殺を企つ」と題する記事で、右腕に銃弾を受けて肘の関節以下を切断し、半年ほど前に除隊となった癪兵の自殺未遂事件を報じている。この癪兵は実家が「赤貧洗ふが如くなる」ため、これまで親戚の厄介になってきたのだが、「同家も細々と生計を立てる程」であつたことから、「際限もなく世話になるは氣の毒」と思い無断で家を出て自殺を図つたという。記事は最後に「後援の任に当る諸氏よ、願はくは此憐むべき勇士をして悲境に沈倫せしむる事なきやう後援の実を挙げられたきものなり」と結んでいる。これが報じられると、六日後に今度は当該の神奈川県高座郡の茅ヶ崎村兵事会が「勇士の自殺未遂に就て」と題する反論を寄せた。<sup>(23)</sup>茅ヶ崎村兵事会によれば、彼の家族は「素より赤貧洗ふが如くなる」のであつて、兵事会としては「常に相当の救助を与へ」てきたし「不幸を憐みて同情を寄する人」も大勢いる。しかも、去る六月八日には恩給下付の手続きも済ませている。したがって、自殺を図つた原因は「全く貧困なるが故にあらず」。目下、隣村の篤志者の厚意によって彼の経営する製糸場で働いており、「生計上には何等の差支へざる様に相成り候」ということであつた。なお、この時点で癪兵を「名譽の勇士」と呼んでいることに注目しておきたい。

この二つの記事は、癪兵と地域社会をめぐる様々な問題を示唆している。それらは要するに、帰郷した癪兵の日常生活を誰がどのようにサポートしていくのか、つまり永続的な癪兵援護の主体と方法をめぐる問題と言つてよい。この癪兵は親族の世話を受けたり隣保扶助などもあつて短期的には糊口を凌ぐことができたのだろうが、それを「際限もなく」続けるわけにはいかない。茅ヶ崎村では「兵事会」が「後援の任に当たる」ことになつていたようだが、兵事会が与えていた「常に相当の救助」では暮らせないからこそ、彼は親族の世話になつていたわけだし、

兵事会が申請した「恩給下付」も当時は平均で月額6円58銭に過ぎなかった<sup>(24)</sup>。その頃の細民の生活費は平均して東京（男性）で一ヶ月12円77銭、大阪（男性）で12円8銭である<sup>(25)</sup>。身体に障害を負った療兵の恩給額は、細民の生活費にも遠く及ばない微々たるものであった。もちろん、それでも療兵や家族にとって貴重な金額だったことは確かなのだが、到底恩給だけで暮らして行ける筈もない。しかも、恩給の給付は、申請してから一年近くを要した。茅ヶ崎村の療兵は隣村の製糸場で仕事を得たとは言え、右腕の肘関節以下が切断された状態で、果たして「生計上は何等の差支へざる様に相成り候」とまで言えるかどうか、疑問ではある。

この自殺未遂事件から半年経っても、療兵を取り巻く社会状況はあまり変わっていなかったらしく、依然として「（療兵には）赤貧洗ふが如く求むるに食なく益々飢餓に瀕するもの」が多いこと、そして「隻手を失へる一勇士」が「生活に窮して身を措くに所なく、遂に死を決して海中に投じたる事実」が報じられている<sup>(26)</sup>。

日露戦争の療兵をめぐるのは山田明氏の精緻な研究が多くある。山田氏は障害者史研究の立場から療兵問題の解明に取り組み、長野県や福島県などの事例分析を通して療兵の生活実態や援護状況を明らかにしてきた。それによれば、「下士兵卒家族救助令」のような銃後に対する生活扶助の場合と違って、療兵の扶助体制がなかなか整備されない現状にあつては、極めて貧窮した療兵に対して村方救助、すなわち町村が極貧者を救助するシステムが働いていた。また、恩給が正式に給付されるまでには一年近くを要したため、それまでは各町村の軍事救護団体や町村から金品救助を受けるのが一般的だったという<sup>(27)</sup>。もちろん、その程度や方法は地域によってかなりの違いがあつただろうが、先に紹介した茅ヶ崎村のケースでも類似のシステムが働いていたことが推察できる。ただし、それだけでは療兵を救うことができなかったことを、自殺未遂や入水自殺が物語っている。

ところで、ここで触れておきたいことがある。前章で傷病將兵と地域社会の関係を論じた際、各地の陸軍転地療養所に注目する一方、治癒が見込めず戦時中に帰郷した療兵については言及しなかった。直接的には、戦時中に療

兵が社会問題として報じられた形跡がなく実態を把握しきれなかったため、ではある。しかし、管見の限り、そもそも実態が解明できていないのが現状である。先述した通り、山田氏の優れた研究によって、帰郷した癡兵の生活実態や地域社会の支援状況が解明されてきた。ただ、それは厳密には戦時中を対象としたものではない。より正確に言えば、日露戦争が終結に向かう中で癡兵が社会問題として浮上するようになって以降である。とは言え、おそらく山田氏の研究成果は、除隊した癡兵が各地域に戻り始めた当初についても援用できるだろう。つまり、極めて貧窮した癡兵に対しては村方救助のシステムが働き、各町村の軍事救護団体や町村からの金品救助などもあったと推察する。また、プロレタリア文学などでしばしば取り上げられる癡兵を見ても、戦争当初の癡兵は明らかに「名譽の負傷」として地域に迎えられているし、それが戦後になると厄介視されていく様子を描いた作品も多い。戦時中の帰郷癡兵と地域社会をめぐる問題については、今後の研究課題としたい。

## (2) 「不具者」に対する蔑視と癡兵

もう一つ取り上げたい記事は「愛国婦人会で癡兵の名譽徽章の計画」と題する次のようなものである。<sup>(28)</sup>

戦傷の爲め不具癡疾となりし者は当然国民より特別の尊敬を受くべき權利あるに關はず、公衆をして識別せしむる方法無き爲め、却て下等社会の者又は頑童等より凌辱を受くるが如きことあるを無上の遺憾とし、愛国婦人会員中には之に一種の名譽徽章を与へ常に屋外にて佩用せしめ以て其名譽の不具者たるを表彰し公衆をして之を尊敬するに便ぜしめんと計畫あり。

興味深いのは、ポーツマス条約が締結されてから一ヶ月も経っていないのに、「国民より特別の尊敬を受くべき權利」のある癡兵が「下等社会の者又は頑童等より凌辱」を受けている現状と、愛国婦人会がその原因を「公衆をして識別せしむる方法無き爲め」と捉えている点である。先ほど紹介した八月三〇日付の報道では茅ヶ崎村の

癡兵を「名誉の勇士」と呼んでいたが、「名誉の」は単なる枕詞だったのだろうか。それとも、当時はまだ戦争継続中だったことによるものか。ともあれ、愛国婦人会では「名誉徽章を与へ」て佩用させれば、道行く人々の目に見える形で「名誉の不具者」であることが表彰できると考えた。そうすれば、「単なる不具者」と間違われて凌辱を受けることもなく国民の尊敬を受けるだろう、というわけである。

実際に愛国婦人会は計画を実行に移していた。半年後には13万個の徽章が出来上がり、早速会員が各自配布を始めている。それを報じた記事は「一般人士に於いても本徽章佩用者に対しては其の不幸に同情を表し十分優遇せられんことを望み居れり」と結んで、愛国婦人会の意図するところを明記している。<sup>(29)</sup>

癡兵徽章の必要性を説く声は他からも上がっていた。<sup>(30)</sup>しかし、果たしてどれほどの効果があつたのか、甚だ疑わしい。少なくとも「世人の多くがこの名誉ある軍士を通例の不具者と同視し、これに遇するの道を弁へず」<sup>(31)</sup>という状況は、一年以上経っても変わっていない。

以上、人々がどのように癡兵問題に向き合おうとしたか、新聞報道を通して地域社会の状況を見てきた。最後に、癡兵救護事業の実例を通して日露戦後の癡兵問題を考える。

### (3) 癡兵の名誉と大阪の辰巳会

貧窮する癡兵が続出する一方、癡兵救護をめぐる様々な取り組みも各方面に見ることができる。政府や愛国婦人会では癡兵院の設立に向けて検討を進めていたし、各地方や民間でも独自の支援事業を始めていた。例えば、群馬県上野教育会では軍人救護会から寄贈された六百円を元手に県出身の失明軍人七名を収容し、早くから西洋按摩術を教えていた。収容地が県内ということもあって、慰藉等にも便宜が得られ好評だったようである。この取り組みを紹介した記事は、「各地に於ても此の如くして其地方出身の癡兵に適業を授くるの方法を講じたらんにハ、癡兵

救護の事業ハ自ら円満なる解決」に至るだろうと、それぞれの癡兵に適した救護事業が各地域でなされるのを当局が期待していることを報じている。<sup>(32)</sup>一口に癡兵と言っても、障害の形は個別である。また、生活環境や障害の程度も個別である。全国各地に個別の癡兵問題が存在した。当局が「其地方出身の癡兵に適業を授くるの方法」をそれぞれの地域に期待するのも無理はない。当面あらゆる癡兵に対して当局ができることと言えば、恩給その他の金銭的援助くらいのものでだろう。

失明軍人については、東京盲啞学校でも帝国軍人援護会や内務省の協力を得て支援活動を行った。これは二年間で針術やマツサージを習得させ、卒業後は各地の予備病院で勤務できるようにするということであった。<sup>(33)</sup>上野教育会の場合と同様に、これは一過的な援助と違い、自活の道を拓く支援活動として特筆できる。ただし、東京盲啞学校は全国の失明軍人一二〇余名を対象としたが、当初の志願者はわずかだった。二年間にわたって地元を離れて上京し技術習得に専念することなど、現実的には不可能な者が多かったに違いない。

このような失明軍人に特化した自立支援ではなく、広く第四師団管下の癡兵すべてを対象とした援護組織「辰巳会」が、戦争終結から間もない明治三八（一九〇五）年一〇月二二日に大阪で誕生している。辰巳会が他の軍事援護団体と大きく違う点は、「癡兵諸士ノ名誉ヲ保全スル」ことを目的の第一に置いていることである。<sup>(34)</sup>もちろん、名誉の保全だけでなく貧窮した癡兵の生活支援も大切な目的の一つではあった。しかし、それは単なる金銭的援助ではなく、自活の道を講ずることによって救済しようとするものであった。そうでなければ「癡兵諸士ノ名誉ヲ保全スル」ことはできないと考えたに違いない。「名誉の保全」を重視する癡兵支援組織が誕生した背景を見ていこう。

辰巳会の創設者は、大阪の実業家生嶋栄太郎（明治七年生まれ）<sup>(35)</sup>と言われている。彼が発起人の一人であることは事実だし、多額の資金を投じていることも確かである。しかし、辰巳会が毎月発行していた機関雑誌『癡兵之



友」を丹念に見ていくと、辰巳会の立役者は生嶋栄太郎ではなく、一人の癪兵だったことがわかる。神茂美という癪兵である。彼は旅順第一回総攻撃で負傷して内地後送となり、明治三七年九月に大阪予備病院天王寺分院に入院した。<sup>36</sup>入院中に頭を離れなかったのは「我々癪兵は将来如何になるであらうか？如何に世に処するか、社会は如何に我等癪兵を遇するか」ということだった。なぜなら、彼は「二十七八年戦役の当時、余輩と同じ運命に陥りし癪兵諸士の現状」をよく知っていたからである。すなわち、「(日清戦争の)名譽の負傷者は、今や全く国民に忘れられ、且極めて冷淡にして、接するも殆ど知らざるものの如く、果は世の不具者と列を同ふし、他人の嫌忌を受けつつあるの事実」が現状だったのである。日露戦争で癪兵となった神茂美は、日清戦争の「名譽の負傷兵」が、一〇年を経た今、単なる不具者として冷遇嫌忌を受けている厳然たる現実を前にして、我が身の今後が不安でならなかったのである。負傷の程度や部位などは不明だが、「世の不具者と列を同ふし、他人の嫌忌を受け」ても不思議ではない身体だったのかもしれない。

前章で、大阪予備病院には「我ハ名譽ノ負傷者ナリ、多少ノ自由ハ黙許ノ間ニ之ヲ行フモ妨ケ勿カラシ」と、「名譽ノ負傷者」を自認して驕慢放恣な行動に出る者が多かったことを紹介した。その病院こそ、正に神茂美が入院した大阪予備病院天王寺分院であり、入院したのもちょうど「秩序頗ル紊乱セルモノ」が溢れていた時期だった。それを考えると、彼らが「名譽ノ負傷者」を自認して驕恣な騒ぎを起こした裏側に、神茂美と同様の極めて深刻な不安が潜んでいた、と見ることもできるのではなからうか。

翌年五月下旬、兵役免除となつて退院した神茂美は、「東奔西走南船北馬、一意専心大に癪兵慰藉問題に付て思慮する所」があつたと言う。そして、5ヶ月後に発足する辰巳会の発起人となつて始動したのである。発起人会は7名で「何れも嘗て戦場に於て奮闘したる勇士」であり、そのうち少なくとも3名は癪兵であることが『癪兵之友』を通して確認できる。発起人会を開いて辰巳会の会則を定め、活動事業の第一項に「癪兵諸士ノ名譽ヲ保全ス



ルニ勉ムル事」と明記したのは、彼らである。辰巳会の活動内容や大阪を中心とした地域との関係、実業家の生嶋栄太郎が果たした役割などについては、紙幅に限りもあるため他日を期したい<sup>37)</sup>。ここでは、辰巳会が癩兵を立役者とする癩兵支援組織だったこと、その癩兵自身が「名誉の負傷」の虚構性を見抜いていたことを改めて指摘しておく。虚構を見抜いていたからこそ、現実を、すなわち不具の身となった実体を名誉あるものにする「事業」が必要だったのである。

そもそも「癩兵諸士ノ名誉ヲ保全スル」ことなど可能かどうかはさておくとして、結果的に言えば、辰巳会の事業活動には限界があった。途中で活動の軸足を名誉の保全から貧窮した癩兵の生活援助へとシフトして行かざるを得なくなったのである。不具癩疾者に対する差別や偏見が当たり前の時代にあつて、癩兵が自活できる道は限られていた。多くの癩兵が売薬などの行商で糊口を凌いだが、癩兵同士の販売競争が激しくなると脅迫や強引な押し売りが増え、癩兵は嫌忌と憐憫の目で見られるようになった。一方では、その癩兵を利用した詐欺的な組織や偽癩兵が横行し、行商で暮らす癩兵に疑いの目が向けられるようになった。名誉徽章を佩用させて「名誉の不具者」であることを表彰すれば国民の尊敬が得られると安直に考えた愛国婦人会と違い、辰巳会は癩兵自身が立役者となつて事業活動によつて「名誉の負傷」という欺瞞を乗り越えようした。これは特筆に値する。しかし、日露戦後の現実が待ち受けていたのは、「癩兵諸士ノ名誉ヲ保全スルニ勉ムル」以前に解決しなければならない極めて切迫した生活問題だったのである。

## おわりに

以上、日露戦争の傷病兵と地域社会の相互関係をめぐつて、戦時と戦後の両面から検討した。具体的な事例を通して見た一断面、と言えるだろう。考察の中で最後まで謎だったのは、名誉の負傷の正体である。そこで、最後に

「名譽の負傷」という不思議な現象に言及して結びに代えたいと思う。

本稿は日清戦争から一〇年後の日露戦争を取り上げた。そのため、当時の人々が「名譽の負傷」の「実体」を日常的に目にする中で再び戦争が始まったことがよくわかる。つまり、どんなに「名譽の負傷」が喝采されようと、戦争が終わってしまえば単なる「不具者」に過ぎないことを、人々は体験として熟知していたわけである。それがわかっていながら、新たな戦争が始まると国民の間に「名譽の」が蘇るのはなぜだろう。もちろん、戦争を遂行するには戦意を鼓舞し続ける必要がある、そのためには犠牲となった者を称えなければならぬ。決して「犬死」であってはならないわけであり、当局が「名譽」を喧伝するのはよくわかる。しかし、国民はそれが虚構であることや欺瞞であることを知っているはずである。にもかかわらず、なぜ国民はその喧伝に乗ってしまうのだろう。それとも、犠牲となったことの意味付けなしには現実を受け入れることができず、国民の方から「名譽の」が再生されるのだろうか。あるいは「止むを得ない」と思っているうちに、虚構が次第に現実化して行くのだろうか。

私たちは日中戦争やアジア・太平洋戦争でも同様のことを繰り返している。昭和2年生まれの俳優土屋嘉男氏が子ども時代の思い出を書いている。<sup>(38)</sup> その中で、当時子どもたちの間で「遺骨ゴツコ」がはやっていたことに触れている。子どもたちは胸に白い小箱を抱いて行列して遊ぶ。そして口々に歌うのだ。

昨日生まれた、豚の子が、

蜂に刺されて、名譽の戦死。

豚の遺骨は、いつ帰る。

四月八日の花祭り、

豚の母さん、悲しかろ…。

周囲の大人が使っている「名譽の戦死」という言葉に、子どもたちは何かしら胡散臭いものを感じていたのかもしれない。

れない。生まれたばかりの何もわからない子豚が蜂に刺されて死んでも名譽の戦死だと、大人を揶揄しているようにも思える。その一方で、子どもたちの間では「名譽の戦死」という言葉が「ギャグ」になって、「遺骨ゴツコ」という遊びの中でギャグとして歌っていたと考えることもできる。子どもたちに限らず、「名譽の」という言葉を誰もが本心から口にしていたわけではないだろう。

しかし、その一方で「譽れの傷痍兵」に「終生変らぬ愛と同情を捧げ得る崇高な精神の花嫁」を育成するための「花嫁学校」が登場し、「すゝんで白衣の勇士に嫁ぐ純情な婦人」を募集しただけでなく、<sup>(39)</sup>実際に少なからぬ女性たちが自ら進んで「譽れの傷痍兵」の花嫁になったのである。<sup>(40)</sup>「当時の女性にとつて、白衣の勇士」はあこがれに近い存在」だったという見方があるが、<sup>(41)</sup>そうだとすれば「名譽の」は本当に再生したことになる。

そして、戦争が終わるとやはり彼らのことは忘れられた。戦後二五年の歳月が流れた昭和四五（一九七〇）年、その「譽れの傷痍兵」と「崇高な花嫁」が箱根の療養所でひっそり暮らしていることが報じられた。<sup>(42)</sup>取材した記者は、ツル子さんという女性が昭和十八年に結婚し県知事の表彰も受けたことなどを紹介したあと、今もそこで暮らす「十八人の奥さんたちは、『自分で選んだ道だから』と一様に言うだけで、多くを語りたがらない」と記事を結んでいる。

日清戦争の「名譽の負傷兵」が戦後には「世の不具者と列を同ふし」嫌忌の対象となつて冷遇される中、日露戦争が始まると再び「名譽の負傷」と歓喜の声が湧きあがり、戦争が終わると「痍兵」という「不具者」として憐憫や嫌忌や差別を受けた。そして、日中戦争やアジア・太平洋戦争が始まると、また「譽の傷痍兵」「白衣の勇士」と称えられ「崇高な花嫁」まで迎え、やがて戦争が終わると忘れ去られて何十年も箱根の療養所でひっそりと暮らしている。欺瞞だとわかっているのに、戦争が起こるたびに国民の間に「名譽」が蘇るのは、一体どうしたことだろう。

〈参考文献〉

荒川章二『地域と軍隊』青木書店、二〇〇一年

一ノ瀬俊也『近代日本の徴兵制と社会』吉川弘文館、二〇〇四年

〇四年

今西聡子『八史料紹介・翻刻』田中小一郎『日露戦争従軍日誌』、『文化論叢』第一六号、神戸女学院大学大学院、二〇〇九年

『中山寺の日露戦病死者追弔絵馬をめぐる一考察』、『歴史と神戸』第五〇巻第三号、二〇一一年

『日露戦争期の陸軍輜地療養所—中山寺の事例を中心に—』、『市史研究紀要たからづか』第二六号、二〇一三年

『日本陸軍の軍事医療—病院・療養所』、『地域のなかの軍隊』第8巻、吉川弘文館、二〇一五年

大江志乃夫『日露戦争の軍事的研究』岩波書店、一九七六年

大阪府救済事業研究会編『大阪慈善事業乃采』一九一七年

郡司 淳『軍事援護の世界 軍隊と地域社会』同成社、二〇〇三年

『傷痍軍人の視座から戦争の時代を読み解くために』、『編集復刻版 傷痍軍人・リハビリテーション関係資料集成』第一巻、六花出版、二〇一四年

高砂町史編纂委員会『高砂市史 高砂町誌』一九八〇年

内務省地方局『三十七八年援護事業誌』一九〇七年

矢野慎一『傷痍軍人療養所の歴史—特に箱根療養所を中心として—』、『小田原地方史研究』第二〇号、一九九七年

山田 明

九七年

『日露戦争時の廃兵の生活困窮と援護計画—廃病院設立と内務省廃兵調査の地方展開を中心にして—』、『日本福祉教育専門学校研究紀要』第四卷第二号別冊、日本福祉教育専門学校、一九九五年

『日露戦争時帰郷廃兵の生活と地域援護—長野県下廃兵調査を中心に—』、『日本福祉教育専門学校研究紀要』第五卷第一号別冊、日本福祉教育専門学校、一九九六年

『日露戦後明治期における廃兵の生活問題と廃病院政策の特質』、『日本福祉教育専門学校研究紀要』第十三卷第一号別冊、日本福祉教育専門学校、二〇〇五年

『明治期陸軍輜地療養所と湯河原・箱根・熱海』、『日本福祉教育専門学校研究紀要』第十五卷第一号、日本福祉教育専門学校、二〇〇七年

『生島永太郎と辰巳会・大阪保善院—機関雑誌『廃兵之友』を材料にして—』、『天理大学人権問題研究紀要』第一三三号、天理大学、二〇一〇年

『明治三十七八年戦役陸軍衛生史 第一巻衛生勤務』、『日露戦役陸軍衛生史編纂委員会、一九一二年』、『明治卅七八年戦役陸軍政史 第七巻』山田忠、一九一一年（湘南堂書店、一九八三年復刻）

陸軍省編

陸軍省編纂

日露戦争の傷病兵と地域社会

二二

## 註

- (1) 今西聡子「八史料紹介・翻刻」田中小一郎『日露戦争従軍日誌』、『文化論輯』第一六号、神戸女学院大学大学院、二〇〇九年（原本は城崎町森貞淳一氏所蔵）
- (2) 明治三十七年八月一七日『神戸又新日報』「城崎温泉の傷病兵」
- (3) 明治三十七年八月一七日『神戸又新日報』「傷病兵歓迎」
- (4) 太田垣士郎伝編集会議『呼ぼうよ雲を』太田垣士郎伝一九七六年、p 25
- (5) 明治三十七年一月五日『神戸又新日報』「傷病兵の転療と高砂町」
- (6) 明治三十七年九月一日『大阪朝日新聞』「有馬より」
- (7) 陸軍省編纂『明治卅七八年戦役陸軍政史 第七巻』山田忠、一九一一年（湘南堂書店、一九八三年復刻）p 38
- (8) 今西聡子「日露戦争期の陸軍転地療養所―中山寺の事例を中心に―」『市史研究紀要たからづか』第26号、二〇一三年
- (9) JACAR. Ref. C03020238200' 明治三十七年「満密大日記明治三十七年十月十一月十二月」(防衛省防衛研究所)
- (10) 明治三十七年九月一五日『神戸又新日報』「傷病兵を訪ふ」
- (11) 明治三十七年九月七日『神戸又新日報』「中山寺の病兵」
- (12) 明治三十七年九月四日『大阪朝日新聞』「有馬より」
- (13) JACAR. Ref. C03020238600' 明治三十七年「満密大日記明治三十七年十月十一月十二月」(防衛省防衛研究所)
- (14) 明治三十七年九月二七日『大阪朝日新聞』「有馬短信」
- (15) 明治三十七年七月一五『神戸新聞』「有馬近況と病傷兵の昨今」
- (16) 前掲 JACAR. Ref. C03020238600
- (17) JACAR. Ref. C03020239000' 明治三十七年「満密大日記明治三十七年十月十一月十二月」(防衛省防衛研究所)
- (18) 同右
- (19) 明治三十八年一月二〇日『大阪朝日新聞神戸附録』「投書」
- (20) 前掲 JACAR. Ref. C03020239000
- (21) 陸軍省編纂『明治卅七八年戦役陸軍政史 第七巻』「戦地還送患者取締二関スル内訓」(明治三十七年九月二十四日付)
- (22) 明治三十八年八月二四日『東京朝日新聞』「名誉の勇士自殺を企つ」
- (23) 明治三十八年八月三〇日『東京朝日新聞』「勇士の自殺未遂に就て」
- (24) 郡司淳『軍事援護の世界 軍隊と地域社会』同成社、二〇〇三年、p 111
- (25) 内務省地方局『細民調査統計表摘要』一九一四、p 90
- (26) 『神戸又新日報』「癪兵救済案」(明治三十九年二月「癪兵の友」第4号、しょうけい館所蔵)
- (27) 山田明「日露戦争時の廃兵の生活困窮と援護計画―廃兵院設立と内務省廃兵調査の地方展開を中心にして―」『日本福祉教育専門学校研究紀要』第四巻第二号別冊、日本福祉教育専門学校、一九九五年
- (28) 明治三十八年一〇月三日『東京朝日新聞』「愛国婦人会

で癡兵の名譽徽章の計画」

- (29) 明治三十九年三月二十九日『東京朝日新聞』「癡兵及遺家族徽章」

- (30) 『京都日出新聞』（明治三十九年五月『癡兵之友』第7号）

- (31) 明治四〇年七月『癡兵之友』第19号「社説」

- (32) 明治三十八年一〇月二〇日『読売新聞』「癡兵の收容救護」

- (33) 明治三十九年六月『癡兵之友』第8号「軍人援護会の解散」

- (34) 辰巳会会則第一條（『癡兵之友』掲載）

- (35) 大阪府救済事業研究会編『大阪慈善事業乃葉』大阪府、一九一七年

- (36) 明治四〇年七月『癡兵之友』第19号「辰巳会の設立と

癡兵之友の成立」

- (37) 山田明氏の先駆的研究「生島永太郎と辰巳会・大阪保善院―機関雑誌『癡兵之友』を材料にして―」（『天理大学人権問題研究紀要』第13号（天理大学、二〇一〇年）に負うところが大きい。

- (38) 土屋嘉男『思い出株式会社』清水書院、一九九三年

- (39) 昭和一三年七月二十四日『東京朝日新聞』「薈れの傷痍兵に嫁げ 愛国婦人会が全国会員へ檄」、昭和一三年一〇月一日『東京朝日新聞』「傷兵の為『崇高な花嫁』を育む」

- (40) 昭和四五年八月七日『朝日新聞』「忘れ去られ生き抜く日々 国立箱根療養所」

- (41) 同右

- (42) 同右